

目的 職場集団は、その集団で決められた約束や規則を直接に強制されるか、あるいは守るようになるらかのかたちで仕向けられている統制的集団の性格を持つ。その成員は地位と役割に従って行動することが求められており、服装においても、個々の価値観は様々であるが、要求される諸基準に自分を適応させていかなければならない。本研究では、職場での着装基準が服装に関する規制の有無や職種によってどう異なるか。さらには、他の私的な生活場面での着装基準まで影響するかどうかについて検討した。

方法 有職女子（20代～60代）106名対象に昭和59年10月、職業や仕事のやりがい、職場での服装に関する規制の有無、生活場面（職場、通勤、家庭、ショッピングなど街、おけいこ事）での着装基準などについてアンケート調査した。着装基準の評価は14～16項目について7段階評価で行い、結果を場面毎に因子分析し、属性別因子得点と因子得点より分類した着装基準のタイプから比較検討した。

結果 1)職場の着装基準は職種や規制の有無により差異があり、規制が自由なほど多様なタイプがみられた。2)仕事を持つことで服装に対する意識が変わった人は約44%いたが、その意識の変化は制服が有る場合に最も少なく、やや規制がある場合が最も多かった。3)職場では類似した着装基準を示した人でも、私的な場面の着装基準はかなり異なった。例えば、①公私共に社会性と分別ある装いをする者②公私共に社会性は重視せず独創的で変化のある装いをする者③公私により多様な装い方を使い分ける者④職場では自分の着装基準はほとんど持たないが私的な場では社会人らしい分別ある装いをする者がみられた。